

IT部門の「真の役割」とは？ 他部門との連携で切り開く データドリブン経営の考え方

データ活用が経営に大きな影響を与えるようになった現代ビジネスにおいて、IT部門はどのような役割を担うべきなのでしょうか？

ドモ株式会社のプリンシパルコンサルタントであり、数多くの大手企業のデータ活用を支援してきた佐々木亨氏に、IT部門が担うべき役割とデータ利活用の成功の秘訣について聞きました。



ドモ株式会社 プリンシパルコンサルタント 佐々木 亨氏



データ活用を取り巻く現状について

—— 今や経営判断に必要不可欠となった「データ活用」ですが、そこに求められているものや、現状の課題についてどのようにお考えですか？

データ活用については、業績をより短い頻度で確認し、経営やマーケティングに活かしていきたいという「リアルタイム分析」のニーズが高まっています。また、複数のデータを横串にして読み解きたい、という高度な分析も求められるようになりました。

ところが、分析やレポート作成の実態を見ると、多くの場合、そこにはExcelによる手作業があります。大手メーカーにおいても、レポートのためのExcelメンテナンスに年間1,000時間かけているというケースがありました。また、過去にBIツールを導入したものの、かゆいところに手が届かず、結局Excelに戻ってしまう現実もあります。

—— データ活用の効率化・高度化の推進者として、まずIT部門が挙げられると思いますが、現在のIT部門はどのような悩みや課題を抱えているのでしょうか？

私はドモに入社する以前、データベースベンダーでエンジニアをしていたため、IT部門の方々がどのように現場で苦勞されているか、ずっと目の当たりにしてきました。今のIT部門には、過剰なほどに多くのことが求められています。古いシステムの更改からDXへの新たなシステム導入、事業部門のシステム運用サポート、さらには社員へのデータ分析手法の教育まで、幅広い業務をしなければなりません。打ち合わせに参加されたご担当者様が疲弊されている様子も、よく見受けられました。「IT部門が本当に担うべきは何か？」ということをあらためて考える必要があると思います。



IT部門の真の役割とは

—— IT部門は多くの「やらなければいけないこと」にどのように取り組むべきなのでしょうか？

そもそもDXは、IT部門だけで担うものではありません。新たな仕組みを導入する際は、他部門と連携していくことが重要です。たとえば、各事業部の中に「橋渡し役」を置いて、その人を中心にトレーニングをしていく

ことで、新たな試みは普及しやすくなります。

データ活用においては、セキュリティを担保するとともに、自社の段階に合わせた「データの民主化とガバナンス」のバランスを取っていくことが大切だと考えています。従業員がデータ活用に不慣れな段階では、まずは活用を普及させることが最も重要であるため、利用制限よりも自由度を担保した方が良いでしょう。そしてデータ活用が盛んな段階に達すると、個々人が独自データを投入するようになってきますので、その時点で、数値の正確性などガバナンスを強めるべきでしょう。また、IT部門では「コスト」「リスク」「効率化」が話題に上りがちですが、データ活用によって創出される価値にも目を向けることが重要です。

—— データ活用ツールを導入する際、セキュリティやガバナンスの他には、どんな点に注意すべきでしょうか？

データ活用が民主化されるにつれて、ツールに求められる機能・役割が変わっていくという点です。最初はダッシュボードを眺めるだけだったのが、やがて自分で分析するようになり、さらには新たなデータを自ら投入し、仮説を確かめたくくなります。段階が変わるたびにツールを導入しなおしては、学習コストがかかってしまうため、将来を見据えた選定が必要です。



優れた操作性を持つBIツール「Domo」

—— これまでお聞かせいただいたデータ活用のニーズに対して、「Domo」はどのように役立ちますか？

DomoがこれまでのBIツールと最も異なる点は、製品のルーツにあります。利用者のITリテラシーに依存せずに使いこなすために、Domoは生み出されました。かつて「導入したものの浸透しなかった」というBIツールは、データサイエンティストなど、専門的な分析のために開発された製品がほとんどでした。

一方、Domoは「スマホで経営する」ためのツールとして誕生しました。もちろんPCでも扱えますが、DomoのCEOであるジャシュ・ジェイムズは、来日するときにはスマホしか持ってきません。操作性が優れており、わかりやすいということは、教育に時間をかけなくとも、事業部門側ですぐに使いこなせるということです。結果として、業務部門側にデータ活用に詳しい人材「データアンバサダー」が育成されやすくなります。圧倒的な使い心地の良さは、社内文化の変革を後押しするのです。

——具体的に、どのように操作性に優れており、わかりやすいのでしょうか？

たとえば、ダッシュボード上で「売上見込みはX万円で、対予算でY円」と、テキスト表示することができます。職場に貼られているような紙のポスターを、リアルタイムの数字で示すことができるわけです。表やグラフを読み解く必要も無く、強いメッセージとして発信できます。

グラフも「着地見込み」までを自動的に表示してくれますし、グラフのスナップショットを撮って「この数字が伸びている要因は何ですか？」とDomo内のチャットで共有することもできます。

また、Domoはコミュニケーションツールまで内包されていますから、数値データやグラフを表示するだけでなく「その結果どのような判断が下されたのか？」といったノウハウまで可視化し、共有していくことができます。データの読み解きに関してもナレッジを蓄積していくことができます。(図版参照)

IT部門に寄り添い、 データ活用で価値を創出していく

——Domoは導入から定着段階におけるIT部門の負担削減に、どう貢献するのでしょうか？

まず、Domoはリアルタイムデータ分析のためのオールインワンソリューションだということです。もしデータベース、データ加工、ETL、操作画面、チャットツールなどを別々に用意していたら、保守に多大な労力がかかってしまうでしょう。どれかひとつがバージョンアップするたびに、互換性を確認しなければならないからです。しかしDomoは単一の製品ですから、その保守コストは不要です。

そして、実際にDomoを導入する際は「エグゼクティブスポンサー」を決めていただくことにしています。これは、データ活用プロジェクトの旗振り役となる人で、CIOや部門長などが担います。「人がアサインされない」「部門を超えてデータが提供できない」といった原因でプロジェクトが滞っ

てしまわないように、あらかじめ調整役を決めておくのです。

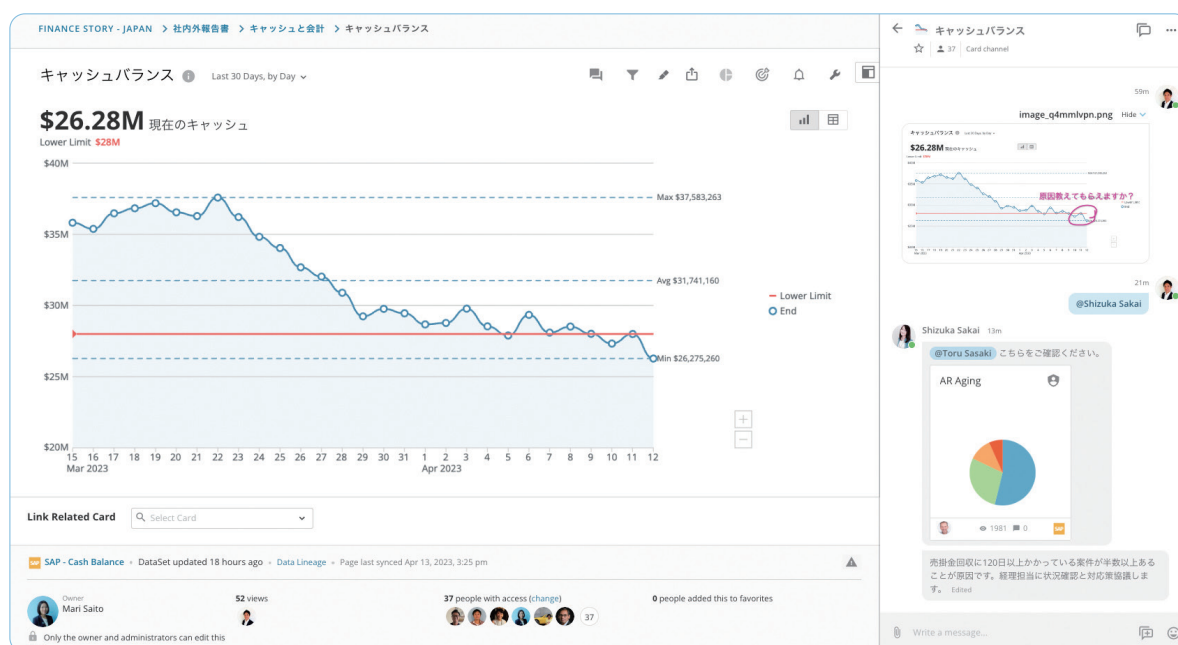
さらにDomoは「内製化」を最初から視野に入れた導入支援をしております。1～2カ月程度で最初のプロジェクトを構築した後は、お客様で回せるようにノウハウを提供していきます。

——Domoの今後の展開について教えてください。

直近では、新たな機能として、PowerPoint向けのプラグインをリリースしました。PowerPoint上に転記したグラフを、ボタン一つで最新版に更新することができます。重要な経営指標は紙で見たい、というケースもあると思いますが、その際、印刷用ファイルを作り直す手間を大幅に省くことができるようになりました。製品開発プロセスの観点でもお客様の声を大事にしており、お客様からのニーズに合わせて、今後も新機能のリリースを積極的に進めてまいります。

——最後に、Domoのコンサルタントというお立場から、これからツール導入を検討されるIT部門のご担当者へ、メッセージをお聞かせください。

Domoには「Domo buddies」というユーザーコミュニティがあり、IT部門向けには技術分科会、データ活用分科会などを定期的に開催しています。他社のIT部門の手法を学び、悩みを相談できるため、一人で抱え込むのではなく、さまざまな人の意見を吸収することができます。Domoのトライアル体験から、Domo buddiesへの参加までを通じて、「Domo」をキーワードにしてつながる心強い「仲間」を得て、自社の価値創造を進めていきたいと思っています。



図版：Domoダッシュボードとチャット機能を使ったコミュニケーション

ドーモ株式会社

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前 1-5-8 神宮前タワービルディング 14F

URL <https://www.domo.com/jp>
問い合わせ <https://www.domo.com/jp/form/talk-to-sales>
30日間の
無償トライアル <https://www.domo.com/jp/start/free>

